

なるだけで、施設と変わらない状況が地域で展開されていないか。いわば地域が施設化していないか、とても危惧しています。

制度を変えていこうとか、これまでは団体で運動してきたけれど、この頃は個人が責任を持たなければならぬ時代になっている。改めて自分たちの立つ位置を、これから確認していくことになるかなと、今の地域をテーマにして思っています。

和田 地域で声を上げられない方々のニーズが潜在化しがちです。ニーズは点となってたくさんあるのですが、だれが拾い集めて顕在化するのか。顕在化したものを地域住民にどう浸透させていくか。住民にできることはたくさんあるのですが、何が必要か分からず行動につながらないのが現実だと思います。私たち社協の役割は、それを住民の方に分かりやすく説明し、情報提供していく中で、自分たちで何ができるか考えるきっかけをつくることだと考えます。

生活は二十四時間三百六十五日ですから、公的なサービスだけでは到底補えません。しかし現在、地域の核となる民生委員児童委員や、自治会の皆さんは大きな負担を抱えています。「雨が降ってきたから二階の窓を閉めて」「違法駐車を何とかして」とか、そういうことを依頼されることもあるようです。地域の一人ひとりの役割分担を再認識する、そういうしくみづくりが求められていると思います。



ニーズを顕在化し、住民と協働する必要がある (和田氏)
若い世代に福祉職の専門性を発信したい (三澤氏)

三澤 特に高齢者福祉に関してですが、社会福祉法人としての福祉サービスのあり方について、たとえば公平性の問題や、低所得者の方に対するサービスの優先などを、もっと社会福祉法人同士の中で認識し、広めていかなくてはいけない。社会福祉法人が、もっと地域の皆さんから親しんでいただける立場になつていかないとはいけません。今回の震災で「人の役に立ちたいから福祉職になりたい」と考えている方もいるそうで

す。これからは若い人たちに福祉職をもっとPRしていきたい。この職業を科学的なものとして、専門性が非常に高いものであると、今、働いている人たちにも自信を持ってやってもらいたい。そして経営者や各施設がそうしたことを発信し、広げていかなければいけないと思います。

県社協の福祉人材センターから紹介されて来てくださる方は、職場にうまく根づいてきています。いい人材を根づかせるのも、社会福祉法人である施設経営者の役割だと認識しています。

高島 一つの取り組みを行うにも、「専門家」「当事者」「市民」という三つの輪があり、それらがうまく絡み合って初めて展開していきます。精神保健にしても、はじめに精神科医等の専門家がいて、次にボランティアが生まれ、そして当事者組織ができ、やがて、厚労省の委員になった当事者の方もいましたね。

そして三つの輪のうち、「市民」のまなざしをどうやってつくり上げ、育て、一緒になってやっていくか。これを担うのが社協です。「専門家とつながりながら市民と共に福祉をつかっていく」そういう思いのもとで、六十年前、戦後の復興期に生まれたのが社協だと思います。人の輪の広がりという点で、社協には新たな課題への取り組みが期待され、仕事が生まれます。ここを何とか確保し、神奈川から発信してほしいです。